

科学基礎論と科学

村上祐子

東北大学

熊沢峰夫

東京工業大学地球生命研究所

工藤光子

立教大学

理系教育に科学方法論が必要であり、科学史・科学哲学の専門家がこの分野に貢献可能であるという主張は、科学基礎論学会会員にはなじみ深いものである。だが文系研究者が理系研究者との共同作業を行うと、このような考え方には総論賛成各論反対となることが少なくない。理系からは求めていたことが議論の俎上にすらあらわれないと失望をあらわにされ、文系からは科学者が哲学者に期待しているものは筋違いであると指摘される。大学の科学論担当で、その機関に科学論の専門家がいないのに、非専門家である科学者に担当させる現象は、この「期待はずれ」「筋違い」の表出であるとともに科学者コミュニティと基礎論コミュニティの断絶により適切な委託先が思い当たらずメディア露出だけが手掛かりになるような事態の頻出でもある。さらには文理横断に限らず、異分野連携・異業種共同に頻出することであるが、関係者のライフスタイル・精神風土の違いが誤解をこじらせる。

今回のワークショップでは、高等教育における理系研究者育成に際して、また理系教育担当者として、科学基礎論分野でのディスカッションにどのような期待をしてきたのか、どうしてそのような期待をするに至ったのか、そしてその期待はふたを開けるとどうなったのか、何が期待と現実の差を生んだと考えているのか、という側面に着目し、熊沢峰夫「科学の哲学、哲学の科学」では研究の側面から、工藤光子「理系大学教員がイメージする科学論」では教育の側面から、お二人の科学者にこれまでの経験を踏まえて忌憚のないご意見をいただく。そのうえで、この領域で科学基礎論関連領域の研究者が貢献するとしたら、何をどのようにもたらしてほしいのか、要望をうかがうとともに、科学史・科学基礎論研究者との議論を通してその実現可能性について、また実現に必要な条件を検討する。